

看護学生の思いやり行動に影響する要因の明確化に関する研究
Clarification of factors affecting consideration behavior in nursing students

高橋永子

Eiko Takahashi

高知大学医学部看護学科

Kochi Medical School Faculty of Nursing

〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

Kohasu, Oko-Cho, Nankoku-City, Kochi, 783-8505

Abstract

The purpose of this study was to clarify factors affecting consideration behavior in nursing students and obtain suggestions for consideration education. A survey was performed using a questionnaire we developed (10 general items and 37 consideration behavior items in daily life) in 1,015 nursing students in a special training school. Factor analysis of consideration behavior in daily life revealed "help", "sense of public morality", and "care" as the 1st, 2nd, and 3rd factors, respectively. According to the years at school, the mean values in all factors were the highest in the 2nd year, followed in order by the 3rd year and 1st year. The factors affecting consideration behavior in daily life were "experience of work", "family structure", "type of discipline at home", "participation in volunteer activity", and "motive for the aspiration to become a nurse"

キーワード：看護学生、おもいやり行動、影響要因

Keywords: nursing students, consideration behavior, affecting factors

緒言

「思いやり」が必要なのは、看護師に限ったものではないが、看護師には対象を理解し、相手の立場に立って対象を最善の方向へ支援する能力が必要とされており、看護師にはより以上に「思いやり」は必要とされる。

この「思いやり」について川島¹⁾は「看護婦を志すものは看護婦を志したそのときから、一般的な思いやりの心を普通の人以上にもっていたと見るべきであろう。」と看護の原点としての思いやりの大切さを述べている。しかし、現代の看護学生は「対人関係が不得手」「相手のことに立ち入ろうせずさめている」傾向があるといわれ、やさしさと思いやりの薄れが指摘されている²⁾。さらに、患者の身になって考え、実行してほしいという患者の声を聞くこともあり、看護師に求める要素の一つにもあげられている³⁾。

高野⁴⁾は「われわれ第二次大戦後の最も物の乏しかった時代からいわばなりふりかまわず現代の空前の豊かな時代を作り上げたのであるが、その間に援助や寛容や慈善や同情心

など人間がしあわせな集団生活を営んでいくための数々の心の特性を忘れていたきらいがあった。これはただ大人だけがそうであっただけでなく、子供の教育上の配慮においても同様であった。(中略) 他人を愛する心の育成こそ、最も重要であり、基本的な問題であることに想到したのである。」と述べている。このように看護学生も競争社会の中で受験戦争を乗り越えてきており、友人に対してやさしく接するということを学ぶ機会は少なく、思いやりも看護教育の場で意図的に育てないと育たない状況にあると考えた。

看護学生を対象にした思いやり行動に関する研究は報告されているが^{5)~10)}、思いやり行動尺度を作成し、実態を調査し、要因を明らかにしたものはない。

そこで、看護学生の日常生活上における思いやり行動と思いやり行動への影響因子を明らかにし、思いやり教育への示唆を得たいと考えた。

I 研究目的

看護学生の日常生活上における思いやり行動と思いやり行動への影響因子を明らかにし、思いやり教育への示唆を得る。

II 用語の操作的定義

「思いやりの」専門用語は、向(順)社会行動 (prosocial behavior)・援助行動 (helping behavior)・愛他的行動 (altruistic behavior)^{11)~15)} である。最も代表的な表現は向社会行動であり、向社会行動と「思いやり」は同一概念として使用されている。

本研究では「思いやり」、「思いやり行動」、を以下のように定義する。

- ① 思いやり：相手の状況を見て、相手の立場になってみることで、相手の役に立ちたいと思うこちら側に生ずる感情。
- ② 思いやり行動：他人の利益のために、自発的に生ずる行動でその実行者にとっては損失や犠牲が伴うにもかかわらず、他からの報酬は一切期待しない行動。

III 研究方法

1. データ収集方法

1) 調査対象者

全国のA設置主体の専修学校64校のリストからランダムに16校を選び、調査の承諾を得られた12校に配布した。配布は、各校から調査可能と回答が得られた第1学年から第3学年とし、配布枚数は、1015枚であった。

2) 調査期間

平成16年7月1日から7月31日

3) 調査内容

(1) 属性

学年、年齢、性別、アルバイトの経験の有無、家族構成、家庭のしつけのタイプ、手伝いの程度、ボランティアへの関心・参加状況、看護師になろうとした動機など10項目。

(2) 日常生活上での思いやり行動の調査尺度作成の過程

- ① 菊池¹⁶⁾により開発された向社会的行動尺度（大学生版）20項目、および文献から思いやり行動と思われる項目を抽出した。
- ② A校に在学中の看護学生、1年生から3年生の学生全員124名を対象に「日常生活上で自分が行った思いやり行動」を自由記述式で書いてもらい、類似項目を整理した。
- ③ ①と②を参考に日常生活上での思いやり行動尺度37項目、うち、10項目を逆転項目とした。
- ④ A校看護学生34名に③の調査用紙でプレテストを実施、日常生活上での思いやり行動尺度37項目、うち逆転項目を7項目に修正し、調査用紙とした。

(3) 評定尺度

評定尺度は「全くあてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5段階の尺度で回答を求め、それぞれ1点から5点配点をし、逆転項目には、配点を逆転し、思いやり行動がとれる方が高い得点となるようにした。

4) 分析方法

(1) 調査項目ごとの記述統計

(2) 日常生活上での思いやり行動では項目ごとに平均値をもとめ、それぞれに関連する要因を明らかにするために対象者の背景、家庭のしつけのタイプ、ボランティアへの関心・参加状況、看護師になろうとした動機別でt検定・F検定を実施した。なお、正規分布に従わない場合はクラスカル・ワリス検定を採用した。

(3) 日常生活上での思いやり行動の学年による違いを明らかにするためにバリマックス法による因子分析を行い、因子を抽出した。標本妥当性は、KMO(Kaiser - Meyer - Olkin)検定により測定し、信頼性はクロンバックの α 係数を求めた。

(4) 統計処理には統計ソフトSPSS11.1J for Windowsを使用し、推測統計値の有意水準は両側検定5%未満とした。

2. 倫理的配慮

看護学校の教育責任者宛に往復はがきにて調査の趣旨を説明する依頼文を送付し、承諾の可否について、回答を得た。次に、承諾の得られた看護学校の責任者宛に調査依頼文、調査用紙を一括で郵送し、学生への配布を依頼した。

学生への調査依頼文には調査に不参加でも不利益をこうむらないこと、無記名でデータは統計処理をするため、個人を特定する事はないこと、得られた結果は研究のみに活用し、適性に管理することを記載した。回収は教員の強制力が及ばないように、各個人に配布した返信用封筒を使用し、個人の意志で返送してもらうように依頼した。

IV 研究結果

1. 記述統計学量

質問紙の回収率は59.8%(607名)であった。この回答の得られた607名を本研究の分析対象とした。

2. 対象の概要

1) 対象者の背景

学年別の人数は、1 学年 195 名 (32.1%)、2 学年 218 名 (35.9%)、3 学年 194 名 (32%)、性別は男性 28 名 (4.6%)、女性 579 名 (95.2%) であった。

年齢は、平均年齢 20 歳 (SD 2.65)、年齢構成は 22 歳未満 546 名 (90%)、22 歳から 30 歳未満 45 名 (7.4%)、30 歳以上 14 名 (2.3%) であった。

職歴については、「有」と答えたものは 47 名 (7.7%)、「無」と答えたものは 555 名 (91.4%)、アルバイトの実施については、「はい」と答えたものは 250 名 (41.2%)、「いいえ」と答えたものは 349 名 (57.5%) であった。

家族の平均人数は、5.1 人 (SD 1.31)、5 人未満が 223 名 (36.7%)、5 人以上が 383 名 (63.1%)、祖父母の同居別では、「有」と答えたものは 273 名 (45%) 「無」と答えたものが 333 名 (54.9%) であった (表 1)。

家庭でのしつけのタイプでは、「なぜいけないのか考えさせられた」と答えたものは 198 名 (32.6%)、「約束を守れないときは罰則があった」と答えたものは 128 名 (21.1%)、「厳しく注意されることはなかった」と答えたものは 86 名 (14.2%)、「成績があがるとほうびがもらえた」77 名 (12.6%)、悪い時、無視され、かまってくれなかった 38 名 (6.2%) の順であった。

表 1 対象者の背景

				(n=607)			
項 目		人数	%	項 目		人数	%
学年	1 学年	195	32.1%	職歴	有	47	7.7%
	2 学年	218	35.9%		無	555	91.4%
	3 学年	194	32.0%		無回答	5	0.8%
	合計	607	100%		合計	607	100.0%
性別	男	28	4.6%	アルバイト歴	有	250	41.2%
	女	578	95.2%		無	349	57.5%
	無回答	1	0.2%		無回答	8	1.3%
	合計	607	100%		合計	607	100%
年齢	22 歳未満	546	90.0%	家族構成	5人以上	383	63.1%
	22 歳~30 歳未満	45	7.4%		5人未満	223	36.7%
	30 歳以上	14	2.3%		無回答	1	0.2%
	無回答	2	0.3%		合計	607	100.0%
	合計	607	100%		祖父母同居	有	273
平均年齢	20 (SD 2.65)			無		333	54.9%
				無回答		1	0.2%
				合計		607	100%

3. 日常生活上での思いやり行動の因子分析

日常生活上での思いやり行動において三学年間に共通する因子の違いをみるために因子分析を行った。

2 学年と 3 学年の平均値の差が 0.1 以内項目 31 項目を対象とし因子分析（主因子法、個有値 1 以上の値についてバリマックス回転）を行った。因子負荷が 1 つの因子について 0.30 以上、かつ 2 因子にまたがって 0.30 以上の負荷を示さない 20 項目を選出した。Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測定は 0.824、Bartlett の球面性検定は有意確率 0.0001 をもって 3 因子が抽出された。

第 1 因子は“老人や子どもが道に迷って困っている時、一緒に連れて行く”、“障害がある人や老人が横断歩道を渡るとき、困っていたら、手を引いて一緒に横断歩道を渡る”、“老人や荷物をたくさん持った人がいると先に行き行ってドアを開ける”などの項目を含んでおり、「手助け」と解釈された。

第 2 因子は“ポイ捨てした場面を見かけても知らない振りをする”、“公共の場でごみが落ちていても拾わない”、“道路に危険と思われるものが落ちていても通り過ぎてしまう”などの項目を含んでおり、「公共心」と解釈された。

第 3 因子は“ドアを閉めるとき、音をたてないように気をつける”、“列に並んでいて、急ぐ人のために順番を譲る”、“トイレや玄関で履き物が散らばっていても整頓しない”などの項目を含んでおり「気遣い」と解釈された。

因子の寄与率は第 1 因子は 17.885、第 2 因子は 13.301、第 3 因子は 13.136 で累積寄与率は 44.322 であった。

また信頼性検討のためクローンバックの α 係数を算出したところ、全体で 0.697、第 1 因子は 0.678、第 2 因子は 0.21、第 3 因子は 0.473 で内部一貫性がみられた（表 2）。

9. 日常生活上での思いやり行動の 3 因子の解析

1) 学年との関連

日常生活上での思いやり行動において、学年別で比較してみると、第 1 因子（手助け）・第 2 因子（公共心）・第 3 因子（気遣い）共に 2 学年の平均値が高く、次いで 3 学年、1 学年の順となっている。第 1 因子・第 2 因子で有意差を認めた ($p < 0.05$)。

2) 職歴の有無との関係

日常生活上での思いやり行動において、入学前の職歴の有無との関係では第 1 因子（手助け）で「有」の平均値が高く、第 1 因子で有意差を認めた ($P < 0.01$)。

3) 祖父母同居別

日常生活上での思いやり行動では、第 1 因子（手助け）、第 2 因子（公共心）、第 3 因子（気遣い）全ての因子で「有」の方の平均値は高く、第 2 因子で有意差を認めた ($p < 0.05$)。

表2 日常生活上での「思いやり行動」の因子分析:回転後の因子負荷量 (直交回転)バリマックス法

	因子1	因子2	因子3	共通性
「思いやり」全体 $\alpha = 0.697$				
項目No. 「手助け」 $\alpha = 0.678$				
2	0.831	0.018	-0.015	0.551
4	0.781	0.116	0.054	0.498
3	0.724	-0.104	0.179	0.432
36	0.516	0.106	0.023	0.359
28	0.336	0.125	0.250	0.208
「公共心」 $\alpha = 0.621$				
11	0.015	0.754	0.001	0.528
1	0.014	0.721	0.130	0.492
13	0.194	0.721	0.185	0.573
「気遣い」 $\alpha = 0.474$				
17	-0.086	-0.133	0.695	0.362
18	0.234	0.122	0.590	0.430
5	0.132	0.159	0.547	0.297
16	0.001	0.084	0.492	0.267
19	0.068	0.068	0.433	0.216
因子負荷量の二乗和				
	2.235	1.729	1.708	5.672
因子の寄与率(%)				
	17.885	13.301	13.136	
累積寄与率(%)				
	17.885	31.186	44.322	

4) 家庭のしつけのタイプとの関連

家庭のしつけのタイプを3タイプ「力中心型」「無視型」「説明型」に分類した。日常生活上での思いやり行動において、全ての因子で「説明型」の平均値が高く、第2因子、第3因子で有意差を認めた($p < 0.05$)。

5) 家事の手伝いの程度との関連

家事の手伝いの程度を「毎日手伝う」、「時々手伝う」、「手伝わない」の3群に分類した。日常生活上での思いやり行動において、第1因子(手助け)、第3因子(気遣い)で「毎日手伝う」、「時々手伝う」、「手伝わない」の順に平均値は高く、第1因子、第3因子で有意差が認められた($p < 0.05$)。第1因子では「毎日手伝う」、「時々手伝う」、「手伝わない」間で有意差を認め($p < 0.01$)、第3因子では「毎日手伝う」、「時々手伝う」間で有意差を認めた($P < 0.05$)。

6) ボランティアへの関心

ボランティアへの関心について「関心がある」「関心がない」の2群に分類した。日常生活上での思いやり行動において、第1因子（手助け）・第2因子（公共心）・第3因子（気遣い）全てで「関心がある」が平均値は高く、第1因子・第2因子・第3因子でそれぞれ有意差を認めた(p<0.001)。

7) ボランティアへの参加状況

ボランティアへの参加状況について「参加している」「参加していない」の2群に分類した。日常生活上での思いやり行動において、第1因子（手助け）・第2因子（公共心）・第3因子（気遣い）共に「参加している」が平均値は高く、第3因子で有意差を認めた(p<0.001)。

8) 志望動機別

志望動機を「積極的」「消極的」の2群に分類した。日常生活上での思いやり行動において、第1因子（手助け）・第2因子（公共心）・第3因子（気遣い）共に「積極的」が平均値は高かった。第2因子(p<0.05)、第3因子(p<0.001)で有意差を認めた（表3）。

表3 各因子と要因との関連

		因子1（気遣い）		因子2（公共心）		因子3（手助け）					
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD				
学年別	1学年	3.64	0.71	2.63	0.83	3.43	0.74				
	2学年	3.81	0.67					2.84	0.82	3.55	0.67
	3学年	3.79	0.62								
職歴	有	3.99	0.66	3	0.85	3.67	0.73				
	無	3.72	0.67					2.74	0.83	3.48	0.67
祖父母同居別	有	3.77	0.67	2.85	0.84	3.53	0.64				
	無	3.71	0.67					2.68	0.82	3.46	0.7
家庭のしつけ	力中心	3.72	0.68	2.74	0.84	3.37	0.69				
	無視型	3.73	0.69					2.60	0.84	3.56	0.64
	説明型	3.77	0.65								
家事の手伝い	手伝わない	3.38	0.75	2.83	0.72	3.30	0.45				
	毎日手伝う	3.82	0.66					2.81	0.81	3.59	0.62
	時々手伝う	3.67	0.65								
ボランティアへ関心 (2段階)	有	3.8	0.66	2.82	0.82	3.57	0.62				
	無	3.52	0.67					2.52	0.86	3.21	0.76
ボランティアへの参加状況 (2段階)	参加している	3.76	0.67	2.79	0.87	3.55	0.63				
	参加していない	3.65	0.67					2.67	0.82	3.31	0.75
志望動機 (2段階)	積極的	3.77	0.67	2.83	0.83	3.62	0.64				
	消極的	3.71	0.65					2.68	0.81	3.34	0.68

* p<0.05

* p<0.001

V 考察

1. 看護学生の思いやり行動の学年による違い

日常生活上での思いやり行動は、第1因子（手助け）・第2因子（公共心）で有意差を認め、2学年が一番高く、3学年、1学年の順であった。

日常生活での思いやり行動は2学年が一番高かった。学習上の問題として藤生¹⁷⁾「2年次では、1年次の肯定してきたあこがれの職業観から、より現実的に職業を直視したとき、大変な負担として感じられ、専門職としての意識が職業としての内容よりも他の要素へ心が移り、心理的混乱期を迎え、職業意識はむしろ低下の状態にある」と述べている。しかし、今回の調査では、日常の思いやり行動は2学年が一番高くなっている。1学年から学んできた看護に関する知識や技術を元に「手助け」として障害者や困っている人に手を差し伸べることができているものと思われる。

2. 看護学生の思いやり行動に共通する因子に影響する要因

1) 労働体験との関連

有意差を認めた因子別にみると、日常生活上での思いやり行動では、入学前の職歴の有無別では第1因子（手助け）で「有」が思いやり行動をとる傾向があった。これは、社会で責任を果たすべく、仕事に就き、その役割を果たそうとする意志を持ち合わせたこと、さらにその職場の厳しさの中で社会性を培ったことから、職歴のない者と差がみられたと考える。

家事の手伝いの程度を「毎日手伝う」、「時々手伝う」、「手伝わない」の3群に分類した。日常生活上での思いやり行動において、第1因子（手助け）では「毎日手伝う」、「時々手伝う」間で第3因子（気遣い）では「毎日手伝う」、「時々手伝う」、「手伝わない」間で有意差を認めた。

労働体験は、相手を気遣ったり、相手の状態に気づいたり、また、困っている人がいると手を差し伸べることができるなど、思いやり行動に影響すると考えられる。

2) 家族構成・家庭のしつけのタイプとの関連

日常生活上での思いやり行動は、祖父母と同居している方が高く、第2因子（公共心）で有意差がみられた。菊池は「子どもたちの考える思いやりのある行動の多くは毎日一緒に生活している周囲の人たちに向けられたものである¹⁸⁾」と述べている。祖父母と同居することにより、他者に対する思いやりが成長すると思われる。

家庭のしつけタイプを「説明型」、「力中心」、「愛情の除去」の3タイプに分類した¹⁹⁾。「説明型」は子どもを説得したり、子どものやったことが相手をどんな気持ちにさせているか考えさせたり、両親がどんな気持ちになっているか気づかせたりする方法である。他方「力中心」は親の腕力で無理に押し切ったり、脅かしたりするタイプである。「愛情の除去」は子どもを無視したり、子どもが話しけても返事をしてやらなかったりするタイプである。

日常生活上での思いやり行動は、第2因子、第3因子で有意差がみられた。日常生活上での思いやり行動において、「説明型」の平均値が高くなっている。この「説明型」で

のしつけの方法は、実際に相手の立場に立って行動したり、考えさせたりすることであり、思いやり行動に繋がると考える。

3) ボランティアへの関心・参加状況

ボランティアへの関心について、「有」「無」の2段階で分析すると、日常生活での思いやり行動において、第1因子(手助け)・第2因子(公共心)・第3因子(気遣い)全てで「関心がある」方の平均値が高く、それぞれ有意差を認めた。

ボランティアへの参加状況について「参加している」「参加していない」の2群に分類した。日常生活上での思いやり行動において、第1因子(気づき)で有意差を認め、「参加している」方の平均値が高かった。

ボランティアへの関心の高いものや参加しているものは思いやり行動がとれていた。「ボランティア活動では、豊かな人間性や社会性を培う²⁰⁾」ことができ、ボランティア活動の潜在的な教育力は青少年にとって必要なものである。

今回の結果からもボランティア活動は思いやり行動に影響があり、思いやりを育てるためにもボランティア活動の支援体制は必要と考える。

5) 志望動機別

志望動機を「人の役に立ちたい」を「積極的」とし、「家族に勧められて」「資格がとれるから」など4項目を「消極的」と2群に分類した。日常生活上での思いやり行動において、第2因子(公共心)・第3因子(気遣い)で有意差を認め、共に「積極的」が平均値は高かった。

「人の役に立ちたい」と積極的な動機で入学してきた学生に比し、「人に勧められて等」消極的な動機で入学してきた学生は、「入学後の学習への取り組みに対する意欲は低くなっていると報告されている²¹⁾」。今回の思いやり行動でも同様な結果となり、消極的な動機で入学してきた学生は、思いやり行動がとれていない事がわかった。看護師になるという意識を持つことができるように、授業や実習をとおして関わっていく必要があると考える。

VI 結語

1. 日常生活上での思いやり行動の因子構造は「手助け」「公共心」「気遣い」の3因子から構成されていた。
2. 日常生活上での思いやり行動に影響する要因は「労働体験」、「家族構成」、「家庭のしつけのタイプ」、「ボランティアへの関心」、「ボランティアへの参加」、「看護師への志望動機」であった。
3. 各学年間で比較すると、日常生活上での援助では、2学年が一番高く、3学年、1学年の順であった。

「思いやり」は他者の経験に関与し、応えることであり、他者の痛みや障害を感じ取ることである。また、他者の経験を共有し、他者のために自分自身を費やすことができる存在の質である。この「思いやり」をもって教員が学生にかかわることは、学生のよきロー

ルモデルになる。今回の研究で思いやりをどう育てていくか、日常の教育活動を見直す必要性を示唆された。

また、今回の研究は、調査対象が限られた設置主体の専修学校であったこと、また、横断的調査であったことから学年間の違いについては、一般化するには限界がある。

引用・参考文献

1. 川島みどり:看護の原点としての思いやり、教育と医学、33(3)、256-257、1985.
2. 嘉屋優子:優しさ・思いやりをどう育成するか、看護教育、35(5)、p395-399、1994.
3. 森下節子他:態度教育の研究(2)、年齢、経験と共に発展する態度意識、看護展望、17(3)、p62-67、1992.
4. 高野清純:思いやりの発達、教育と医学、33(3)、p229、1985.
5. 渡邊美恵子:看護場面の思いやりの測定法の開発、第 27 回日本看護学会集録、看護教育、142-145、1955.
6. 渡辺敦子:看護場面の思いやりの測定法の開発 思いやりテストの妥当性の検討、第 30 回日本看護学会集録、看護教育 142-145、1999.
7. 鈴木ヒロ子:看護場面の思いやり行動の発達、第 30 回日本看護学会集録、看護教育、56-58、999.
8. 一戸妙子:看護のおもいやり行動モデルの作成、看護教育、36(5)、1995.
9. 村上ヒトミ:看護学生がとらえる思いやりの概念と思いやり行動に影響する要因、神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録、25 号、68-75、1995.
10. 前掲書 2) p395-399.
11. 中村陽吉:「他者を助ける行動」の心理学、光生館、p2-4、1987.
12. 菊池彰夫訳:思いやり行動の発達心理、金子書房、p6-7、1993.
13. 原芳男:「思いやり」の社会学、児童心理、5p82-87、1988.
14. 原田純治:思いやりの実験でわかること、現代のエスプリ 291.p48-56、1991.
15. 松井豊:思いやりの構造、現代のエスプリ 291.p27-36、1991.
16. 菊池彰夫:また思いやりを科学する -向社会的行動の心理とスキル- 62、川島書店、1988.
17. 藤生君江:看護学生の自己実現への期待感と看護教育の今日的課題、インターナショナルナーシングレビュー、16(2)、p36、1993.
18. 前掲書 16) p75.
19. 前掲書 16) p18.
20. 興梠 寛:「共生知」の学びの世界へ -学生ボランティア活動に関する最近の動向について-、大学と学生、p7-13、478(4)、2004.
21. 岩本真紀:看護学生のライフスタイルにおける学年比較 -高校時代から現在にかけての変化から-、第 33 回日本看護学会集録、看護教育、192-194、2002.

(2005. 12. 10 受理)